巻 頭 言

鹿児島の生涯学習を展望するジャーナルの発刊

前かごしまＣＯＣセンター社会貢献・生涯学習部門長
教育学部教授　上谷 順三郎

春の風物詩である新茶が出た。春キャベツや新玉ねぎよりも少し遅れて、満を持して登場した新茶。秋の新酒（焼酎）と同じく、季節の変わり目を感じさせるのはもちろん、新たな気持ちを引き立ててくれる、特に鹿児島にとって特別な存在である。

『かごしま生涯学習研究－大学と地域』は、こうした特別な存在となるべく発刊される。新茶と同じで、毎年同じものはない。その都度、その年の味を確かめていただきたい。そしてまた、進取の気風をそこから汲み取っていただきたい。このジャーナル（定期刊行物）は、来たるべき鹿児島の未来を展望する貴重な場となるにちがいない。

第１号の特集は「大学の生涯学習を問う」である。平成15年、鹿児島大学に生涯学習教育研究センターが設立され、『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』が刊行された。現在はかごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門が中心となってこの新しいジャーナルが編集・発行されているが、すでに15年の歴史を持つ鹿児島大学の生涯学習を問い直す特集である。そこには、これまでの歴史的成果とあわせて、解決できずにいる課題があらためて記されている。もちろん鹿児島大学だけの課題というわけではないが、大学、行政、民間等、この生涯学習の取り組みの歴史を再確認する意義は大きい。一方、この新しいジャーナルでは、［論文］、［資料］の他に、［報告］を大学からと地域からとの２本立てにし、これまでとは異なる見方も提供している。

地域密着型を目指す鹿児島大学にとって、全国で初めて掲げた「生涯学習憲章」をどのように具体化していくのか、絶えず問われ続けることになる。本ジャーナルの果たす役割に期待するゆえんである。

特に［論文］では、これからの５年間を議論するうえで欠かせないこととして、以下の３点が随時取り上げられている。いずれも鹿児島大学ホームページの「大学紹介」で閲覧できる。

１．鹿児島大学憲章（平成19年）
２．鹿児島大学生涯学習憲章（平成25年）
３．鹿児島大学第３期中期目標･中期計画（平成28～33年）

この15年、鹿児島大学の生涯学習の教育・研究を牽引してきた小栗有子准教授は、「生涯学習」の用語の概念整理と今後を俯瞰する枠組みの提案を行っている。そして今後の鹿児島大学の課題として「大学教育の大衆化への対応」と「地域という文脈を考慮した大学機能の再考」を挙げている。

グローバル時代の生涯学習問題に取り組んでいる酒井佑輔講師は、上の３にある「グローバルな視点を有する地域人材」の検討と在留外国人の現状を踏まえて、次の３つの問題を指摘している。それは、「在留外国人の多様化・増加に対する適応力」「グローバル化＝英語という発想の陥穽」「外国人労働力を必要とする地域の根本的な問題を考えること」である。

農中至特任講師は、酒井氏が取り上げている「外国人技能実習生」の問題を含めた今後の研究対象の範囲について検討し、小栗氏が整理を試みた「教育」と「学習」の定義についても問題意識を共有しつつ、鹿児島県の歴史的な問題にアプローチするうえで、全国の「教育困難地区」とされた地域の住民の生き方やその社会・教育構造を読み解いていくことの意義を強調している。

［大学報告］では、公開授業受講生の鹿児島大学附属図書館利用の状況が紹介され（利用者としては１割だが、貸出冊数では３分の１を占める）、農学部において2007年から実施されている社会人の林業技術者教育の実際と今後の課題が示されている。平成28年２月に開催された「大学で話すみんなの暮らし」については、参加していた中学生、高校生、大学生、大学院生からのメッセージも掲載され、そのイベントと並行して行われていたアンケート調査の結果も報告されている。本イベントについては実行委員長を務めたこともあり、その準備段階におけるスタッフや関係者がこれまで抱いてきた「生涯学習」への期待や不安など、様々な思いを知る機会となった。そして迎えたイベント当日の会場の雰囲気は、まさに、大学を会場とする「生涯学

習」のあるべき姿の一つをしっかりと見せてくれたと確信する。中高大生といった次世代の担い手と大学、行政、民間の現場の人たちが、立場や世代を超えて、同じ地域の市民として、自分たちの暮らしをよりよくするために語り合い、学び合い、今後の方向性を共に思い描いていく機会が提供できたと思う。このような、大学が「生涯学習」の場を創出するという試みは、始めたからには今後も続けられるべきであろう。

［地域報告］では、「大学で話すみんなの暮らし」に参加した方々によって、多様化する図書館の様子、鹿児島市の生涯学習支援の取り組み、鹿児島県喜入市の「喜入子育てコミュニティ KADAN」の子育て支援の取り組みが、それぞれ豊富な資料・写真で具体的に紹介されている。

以上、新しいジャーナルの発刊を記念し、今後に期待して巻頭言とする。